

2021年11月7日～11月13日 各家庭でのディポーション用テキスト

## ■任務遂行の訓練（3/4）

このような経験は、神の子らの間では珍しいことではない。モーセは人々から拒まれ、荒野で四十年もの年月を送り、ダビデはねたみ狂うサウルに追われて、しゃこのようにユダヤの山腹を逃げて歩いた。エリヤはアハブの治世中、川のほとりに座し、のちに異教徒の家でもてなしを受ける身となった。パウロは召命を受けてまもなく、アラビヤとタルソでひそかな日々を送った。あなたも、ダビデがこう述べているような経験をしているだろうか。「私は、敵対するすべての者から、非難されました。わけても、私の隣人から。私の親友には恐れられ、外で私に会う者は、私を避けて逃げ去ります。私は死人のように、人の心から忘れられ、こわれた器のようになりました」（詩篇 31：11、12）。あなたは決して恐れてはならない。一見空費されたと思えるような長い暗黒の影のような日々にも、もし神に信頼しているなら、あなたの生涯に対する神のみこころをだいなしにするほどに全く無視されることはなく、無関心を装われることもない。牢獄の静寂は、救出の歌をさらに甘美な、さらに力強いものとするのであろう。

失望の波　　パウロは牢の中で死ななかった。「疑惑城」から脱出する道を神がつくってくださったからである。それは奇妙な道であり、人間的に見ればおそらく不必要とさえ思われる道であった。パウロはカイザルに訴えざるをえなくなったが（使徒 25：10-12）、実はカイザルに上訴する法的根拠はなかった（26：32）。しかしそのことによって、他の人々の彼に対する無関心は終わりを告げたのである。モーセはエジプトへ行くように命じられ、エリヤはアハブのもとに遣わされ、タルソ

にいたパウロはアンテオケに呼ばれる。いよいよ神の定められた時が来ると、あなたは神のみこころの中に進み入る。しかし、それはおそらく、あなたが計画していた方法ではなく、神があなたのために最善と見られる方法によるのである。パウロは長い間、「神のみこころによって……道が開かれ」てローマに旅することができるよう願っていた（ローマ 1：10）。神は彼の、また私たちの霊的繁栄のために、それを危険に満ちた旅とされた。

たましいの敵は、人々の怒りや年月の空費という手段でパウロに対する神の御旨を妨害することに失敗したとき、それに代わる策略を持っていないわけではなかった。同様に彼は、あなたをみこころの中心からそらす手段を持っていないわけではない。パウロは囚人としてローマに送られるために舟に乗った。しかし実はパウロは、主の囚人だったのである（エペソ 3：1、4：1）。この囚人としての態度いかんで、天と地ほどの差が生じてくる。主の囚人として私たちは、人々のくびきを恐れる必要はない。私たちの法的な権利は踏みにじられ、正しい助言をしてもさげすまれるかもしれない（使徒 27：11）。また圧倒的なあらしのために「助かる最後の望みも……絶たれ」（20 節）、環境の犠牲者となってしまったかのように思われるかもしれない。

いったいどうしたというのだろうか。神は何年か前にパウロに「ローマでもあかしを」と言われた。そして今、そのすぐ近くまで来てこの大あらしである。たましいの敵は「おぼれるな」と思ってにやりと笑う。今あなたはどうかであろうか。人間的な望みは全く消えているが、神はあなたのたましいの奥底にみこころを明らかに示され、あなたは知識と能力の限りを尽くしてそれに従っている、ということが真実であると言えるだろうか。